何でも診られるお医者さん
「家庭医」が拓く地域医療

地域を外から支える

「町のこし」で町おこし
旧愛知郡役所庁舎保存運動に奔走
並河さんインタビュー

地域の取材を進めていくうちに本校OBである並河冨美代さんが旧愛知郡役所庁舎の保存活動に参加されていることを知り、地域を外から支える立場としての意見を伺った。

並河冨美代さんプロフィール

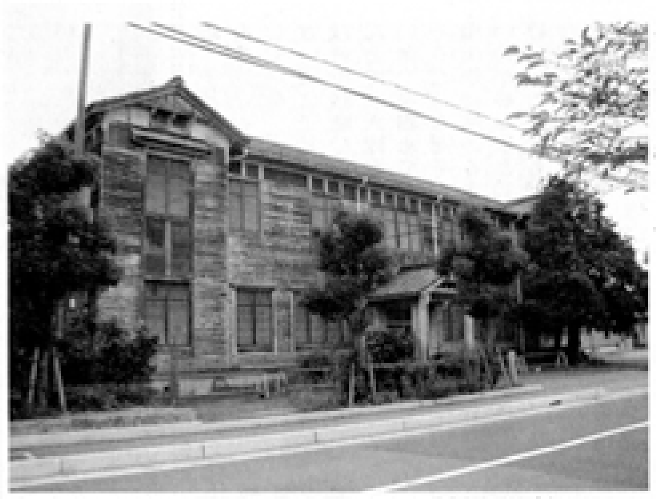
昭和11年生
彦根市出身で現在は大阪府にお住まい
本校・京都市立美術大学（現・芸術大学）をご卒業
愛知川に魅力を感じられ、旧愛知郡役所庁舎の保存活動に取り組む「こころばえの会」発起人として、精力的に活動されている。

並河さんが郡庁舎の保存運動に参加されているのは「るーぷる愛知川」などのまちおこし運動があるのを知ったからだそうだ。

旧愛知郡役所庁舎（郡庁舎）は県内に唯一残る郡役所の建物で、保存が危ぶまれている。保存するにはお金の問題もあり、なかなかうまくいかないそうだ。郡庁舎の建物は大正時代によく見られる建築様式でレトロな趣が感じられる。塗料の剥げた様子も時代を感じさせる。当時、郡庁舎は地域の近代化を代表した建物だけに、この問題は熱を帯びている。

郡庁舎の保存活動に奔走されている並河さんは東高の第三回卒業生で在学中は美術部に所属されていた。芸大に進学され、卒業後は東高の講師として一年間勤務された。

在学中の東高生活について、「クラスメイト達と先生に交渉して授業をやめてもらったり、授業を抜け出して映画を見に行ったりしていた」と、懐かしそうな並河さん。



▲旧愛知郡役所庁舎。大正末期の木造建築で希少価値が高い。

▲駅ギャラリーの看板。私たちが取材に行った日に取り付けられ、新聞部も取り付けのお手伝いをした。

そんな並河さんが美術の道を歩むきっかけとなったのは2年生のとき、先輩が芸大の受験のために石膏デッサンの練習をしていたのを見たことや、友達の持っていた画集を見て感動したからだそうだ。当時の美術部には芸大を目指す人が多く、展覧会にも絵をたくさん出展していたようだ。

芸大を卒業した後、東高時代の友人から愛知川で個展を開かないかと誘いがあった。場所は近江鉄道愛知川駅舎内にあるにある「るーぷる愛知川」というミニギャラリーで、

▲愛知川のまちを歩く

当初並河さんは、「そんな田舎でやっても仕方がないのではないか」と思われた。しかし、実際に個展を開いてみると、地元の人たちが駅を利用するついでに立ち寄ることで、芸術に触れ合ってもらえることに気がついたそうだ。都会で個展を開くとやってくるのは専門家ばかりで、一般の人はほとんど来てくれない、とのこと。並河さんは「るーぷる愛知川で個展を開くことがステータスになってほしい」と微笑みながら話された。

愛知川の町おこしのテーマは「町全体がミュージアム」。「作るだけでなく遺していくことが大切。若い人たちにも本気になってもらいたい。私達はまちを次の世代に遺したい」と並河さん。「町おこし」ではなく、「町のこしで町おこし」が目標だそうだ。（梅）

日本一を「ありがとう」でお祝い
愛知川図書館

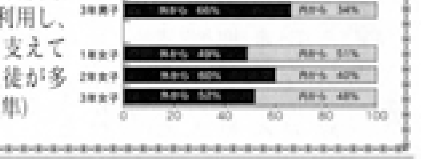
並河さんは私たちを愛知川図書館へ案内してくださった。この図書館はNPO法人「知的資源イニシアティブ」が実施している「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー」で2007年に日本一に選ばれたという。「受賞を何かの形でお祝いしたい」と思われた並河さんたちは図書館に感謝の気持ちを込めて「ありがとうコンサート」という演奏会を開かれたそうだ。（眞）

▶館内のイスやテーブルはオリジナル

東高生は外から地域をささえる派？

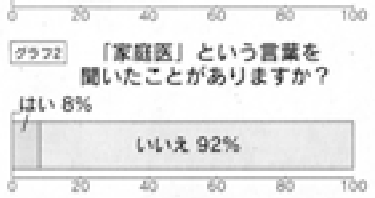
東高生に将来地域を支える方法について、「外から地域を支える立場」か、「内から地域を支える立場」が良いかについてアンケート調査を行った。結果は全体的に「外から支える立場」が多かった。特に1年男子と3年男子、2年女子で数の開きが大きかった。

このことから、東高生は将来、他の都道府県に住み、ふるさと納税制度や寄付金制度などを利用し、自分のふるさとを支えていくことを望む生徒が多いと考えられる。（隼）



外から ⇒
⇐ 内から

地域を支える人に聞く



家庭医
認知度1割満たず

地域医療について2つの質問で348人にアンケートを行った。かかりつけの医師の有無を聞いた質問では「いいえ」と答えた人が全体の約7割を占めていることがわかる（グラフ1）。この結果より、かかりつけの医師ができにくい大病院などの医療機関を受診している人が多いのではないかと考えられる。また「家庭医」という言葉を聞いたことがあるか質問をしたところ「はい」と答えた人が全体の1割にも達していない（グラフ2）。このことから「家庭医」という言葉が、一般にはまだ聞きなれない言葉であることがわかる。この2つの質問の結果を総合して考えてみると、自分たちの地域の身近な医療を利用しているという人が少ないということが考えられるのではないだろうか。（藍）

高まる家庭医の需要
―滋賀医科大学　三ツ浪先生―

地域医療の現状について詳しく調べるために滋賀医科大学の三ツ浪健一先生にお話を伺った。三ツ浪先生は家庭医療学講座の教授であり、家庭医を育成することを目的に活動しておられる。

三ツ浪先生は始めに滋賀県内における地域医療の現状として医師の数が足りていないことを説明された。滋賀県の医師数は全国で32位と他県と比べてみてもとても少ない。次に、そういった現状から各地域において1次医療を担える医師が必要であること、そのためにも1次医療の分野でどのようなことにも対応できる医師として「家庭医」という存在を増やしていくべきであることを話された。また、三ツ浪先生は地域医療を担っている花戸貴司先生のような家庭医が今後も増えていくことを望んでおられた。（藍）

住民全員の健康管理で「地域完結型医療」を

三ツ波健一先生

三ツ浪先生に家庭医についてお聞きしたところ、以下のことを教えて下さった。

医療には第一次医療から第三次医療までがあり、家庭医は第一次医療に分類される。第一次医療は主に外来や健康診断、感染症の予防接種などを担当し、第二次医療は入院が必要な患者を担当する。第三次医療は命に差し障る疾患の治療が主な仕事だ。しかし最近は、風邪などの軽い症状でも第二次医療を扱う機関に外来に来る患者が増え、担当の者の負担が増加している。また、日本は臓器別に細かく専門を決めて医者を育ててきたことも問題視されている。

そこで家庭医には広い分野の知識をもって、その地域全ての住民の診療を行うことが期待されている。また重病をいち早く判断し、第二次医療に患者を紹介するのも家庭医の重要な役目だ。住民の「安心」という面においても、家庭医の存在は大きなものとなっている。

最後に、医療においての「地域を担う」とはどういうことだとお考えかを尋ねると「地域医療機関の連携と役割分担により、地域の住民全員の健康管理に責任を持つことから、すべての疾患に対応することまでを地域で完結させる『地域完結型医療』を実現すること」とお答えになった。（白樺）

可能性は無限大
地域医療を知るワークショップ

▶研修の成果を発表する

8月29日に長浜ロイヤルホテルで地域医療について知るためのワークショップが行われた。この会には滋賀医科大学と自治医科大学の学生の方々と、診療所の先生方の総勢26名が参加した。

この会は事前に診療所で地域医療を体験された学生の皆さんの発表、家庭医の先生のお話が主で、最後は参加者の意見交流で幕を閉じた。診療所での研修では、学生の皆さんは先生の小児検診や往診の見学、患者さんの血圧の測定などを体験されたそうだ。

▼会場は終始和やかな雰囲気だった

また、診療所の医師の方のお話によると、怪我や疾患には農業や祭り、患者さんのバックグラウンドも関係しているとのこと。それも含めて患者さんに接していくことが家庭医の魅力の一つでもある。これを体験した学生の皆さんは「1人で活動するので可能性は無限大だと思う」「先生はすごく信頼されていると感じた」などと自分の考えを述べられた。（白樺）

地域を内から支える

僕の専門は「永源寺」です
永源寺診療所　花戸先生インタビュー

今回のワークショップを主催された東近江市の永源寺診療所の花戸貴司先生にお話を伺った。

平成7年に自治医科大学を卒業された先生は地域に根ざした、患者との距離が近く、信頼される家庭医に魅力を感じられたそうだ。信頼関係を築くために心がけていることを伺うと「その町に住み、医者以外の付き合いをすることによって患者さんが身近になり、自分のことも認めてもらえる。地域づくりや町おこしを医療を通して創っていくことが大切だと思う」とおっしゃった。

診療所のある永源寺は合併前は大津の次に広かったそうだが、診療所は2軒しかないという。「だからこそ、どんな怪我や病気でも自分でできる範囲の医療には自分で責任を持っている。『24時間診ます』とは言っているが、夜中に電話がかかってくることはそれほどなく、患者さんも無理を言わない。医師と患者は『お互い様』。お互いを尊重する人間関係の上に地域医療がある」と先生は胸を張られた。先生は「100%を求めすぎると萎縮した医療になるが、家庭医は夢や希望もある仕事なので、興味がある方はぜひ家庭医になって一緒に仕事をしましょう」ともおっしゃっていた。

▲地域から信頼される「家庭医」花戸先生

命の大切さ知ってほしい

先生は校医をされている学校で「命」についての授業をされることがあるのだそうだ。「命はリセットできると考えている子どもたちがいる。たぶんその子たちはまだ身近な人の死を経験したことがないんだと思う。人が死ぬのは悲しいが、そういう経験をすることで、『命の大切さ』を学んで大きくなり、次の世代に繋いでいってほしい」と、先生はおっしゃった。

最後に「医療を通して『地域を担う』とはどういうことだと思うか」と伺うと「『永源寺の医療のことは何でも僕に聞いて』と言えるようになることだと思う」と答えられた。先生は「何科が専門ですか」と聞かれたとき「僕の専門は永源寺です」と答えられるのだそうだ。地域の人の繋がりや産業を理解することでその地域に合った医療ができるという先生の思いが伝わってきた。（翰）

医大生に聞く　地域医療の魅力
生死を支える医師として

今回のワークショップの目的は医学生の人達に、普段はあまり触れる機会のない地域医療を体験してもらうことにある。ワークショップに参加された学生の皆さんは何を学び、何を感じ、そして何を考えたのだろうか。滋賀医科大学生の大竹要生さん、矢端博行さん、大江祐一郎さんと自治医科大学生の細野舞さんの四人にお話を伺った。

まず初めに、地域医療になぜ興味を持たれたのかを尋ねると、大竹さんは「もともとは小児科医を目指していましたが、未来を救う仕事がしたかったので地域医療に興味を持ちました」と答えてくださった。また、矢端さん、大江さんのお二人も「開業医になりたいと思っていたので、開業の一つの形として地域医療に興味を持ちました」、「ガン治療に興味があるのですが、ガンの患者さんには精神的なしんどさもあると思い、精神面のケアという部分に共通点を感じて興味を持ちました」と語ってくださった。細野さんは「もとは国境なき医師団に興味があったのですが、海外ではなく日本にも医師が足りていない地域があると知り、家庭医を志しました」と力強く答えてくださった。

次に、医療においての「地域を担う」とはどういうことだと考えておられるか伺った。皆さん順に「命や人の生死は生活の根本で中核です。それを支える医師として働けることだと思います」、「病院の中だけでなく、地域の風土も含めて病気を診ることだと思います」、「同じ病気でも生活の仕方によって原因が違うので、地域性も理解することだと思う」、「医療に限らず、地域としての役割を持つことだと思います」と話してくださった。

最後には高校生に向けて「やりたいことを明確にしておいて欲しいです。目的がないと大学に入学した時点で燃え尽きてしまいます」、「自分のしたいことをつきつめて、納得した道を歩んでください。今のうちに存分に悩んで欲しいです」、などとメッセージをくださった。

今回お話を伺ったのはほんの数人だが、ワークショップに参加したことで誰もが家庭医の存在の大切さや、地域の住民のあたたかさを感じたようだった。（白樺）

持ち帰り弁当
ひこね ごはん亭
〒522-0042　滋賀県彦根市戸賀町92-3
電話　0749-21-6151

御菓子司
木村菓舗
彦根駅前通り
電話(22)1934番

余呉湖畔・料理民宿
みずうみ
〒529-0523 滋賀県伊香郡余呉町川並1215
TEL0749-86-3213・FAX0749-86-3855
JR北陸本線余呉駅から徒歩20分（送迎あり）。お車の場合、北陸自動車道・木之本ICからR365で余呉湖畔まで約10分。

☆☆☆　お買物は銀座商店街でどうぞ　☆☆☆
ゆるキャラ®まつり in 彦根関連イベント
10月23.24日　あきんど祭り　お買物500円で1回ガラポン抽選できます
24日　ゆるキャラたちと銀座でもちつき大会
当商店街の New ゆるキャラ
今秋デビュー
愛称募集中